遠隔によるマレーシア中学生・高校生への着物文化ワークショップ

横昭和学院短期大学
大矢　幸江
横浜国立大学教育学研究科
薩本　弥生
埼玉大学
川端　博子
共栄大学
伊藤　大河

1. 緒言

世界的な新型コロナウイルス感染症の流行の影響をうけ、学校現場で対面授業が制限され教育方法に様々な変化がもたらされた。その一つとして ICT（Information and Communication Technology）を活用した教育環境の普及があげられる。子供たちは一人一台の端末を持ち、自宅からでも学校の授業が受けられるようになった。一方、国際的な人の往来は減少し、今なおコロナ以前の状況には戻っていない[1)]。

筆者らはこれまで、プロジェクト研究「きもの文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発」において、国内外での浴衣着装ワークショップの実施や教材開発等を行い、日本の着物文化の理解や文化交流につながる教育プログラムを検討、開発を行ってきた。この活動により、若年層のきもの文化への興味・関心の喚起や、国際交流・相互理解への貢献も期待できることが明らかとなった[2)~4)]。しかし、世界的な感染症の流行によって海外に赴く実践が困難となり、2020 年に予定されていたマレーシアの高校や大学でのワークショップは実施延期となった。対面によるワークショップ再開への見通しは立たず、新たな教育プログラムを検討する必要性が出てきた。海外に向けての実践で、訪問型のみならずオンライン型のワークショップに取り組み、様々な状況に応じたプログラムの展開を検討し継続性のある活動を目指している。

教育環境の現状を見るとデジタル化が加速され、コロナ禍に起因する遠隔授業や遠隔のものづくり教育が多数実施された[5)~7)]。情報機器や web サービスの向上によって授業内容が再視聴できる、時間の効率的利用などのメリットが報告[5)]される一方で、カメラ映像や資料の共有だけでは深い議論ができない、機器や通信にまつわる不便さなどのデメリットも報告され、対面授業の希望が多い[6)]現状が示されている。今後は対面授業に遠隔授業のメリットをどう取り入れるか等が課題[6)]となっている。オンラインによる授業や研修は国内にとどまらず、国際間の活動においても活発となっている。異文化理解を遠隔ワークショップで行った実践[8)]では、グループ活動を通し新しい視点で異文化をとらえる効果が得られていたが、遠隔による体験的な活動による研究の報告は見受けられなかった。そのような中、2021 年に延期となったワークショップ実施予定校の 1 つであった、マレーシアの高校教員から遠隔によるワークショップの実施が依頼された。先方は大規模（1000 人まで可能）参加できる遠隔システムのライセンスを所有していた。筆者らは初の遠隔によるワークショップについて事前に先方と数回の遠隔打ち合わせを行い、内容や方法を吟味し、体験的な実践が実現可能であると判断し、実施することにした。

本研究では、デジタル機器を活用した遠隔手法によるワークショップがマレーシア中学生、高校生の着物文化に対する理解を深め、興味関心を高め、日本理解と文化交流への興味を高めるのに有効かを検証することを目的とする。中学生か高校生かという参加者の属性にも着目し、本ワークショップの効果を検証する。

なお、本研究に先立ち、横浜国立大学倫理委員会に申請し、承認を得た。マレーシア校の担当教員には、研究の趣旨を伝えインフォームドコンセントを取り、参加者には教員を通じてアンケートへの協力を依頼し、写真撮影の許可を得た。

2. 研究方法

2-1　遠隔ワークショップ実施方法

2021年11月23日、マレーシアのツンジン高校(Tsun Jin High School）がホストとなり、Zoomによる遠隔開催都市、現地Smallホール、参加者の中学生と高校生自宅、および日本国内のワークショップ主催者をデジタル機器でつなぎ、双方向によるワークショップを実施した。ツンジン高校はクアラルンプールに所在する1962年に設立された学校である(中学部1955年設立)。6年間の中等教育活動をしており、3131人の生徒が在籍する。本実践は生徒に募集をかけ参加者を募った。

ワークショップの事前打ち合わせを数回行った。延期前は講義及び浴衣着装、体験ワーク(日本舞踊の見立てワーク)を想定していたが、遠隔により着装は不可能となった。しかし、有意義なワークショップのためには体験型のワークが必要だと考えられたため、マレーシア校の生徒の特性を知る担当教員と吟味、検討を重ねた結果、日本に興味が高い生徒が興味を示す可能性がある日本舞踊体験ワークを実施することとした。日本舞踊体験ワークは、イタリアでの対面ワークショップで実施(2018年)の実績がある。そこでオンライン実施時には、イメージ作りとともに体験ワークへのモチベーションの向上を期待し、まずイタリアでの様子を動画で共有することとした。体験ワーク時には示範演舞の様子だけでなく生徒が体験している様子を画面で共有することによって、自宅からの参加者にも体験方法がわかりやすくなると考えた。そこで一部の生徒（日本語クラブに在籍する高校3年生）をマレーシア校のSmallホールに集わせ、日本側スタッフとの遠隔による双方向性ワークを実施しその様子を画面共有することとした。初めにSmallホールの生徒によるワーク体験の様子を投影し、それを見て示範を示す日本側のスタッフがアドバイスを与え、現地生徒が踊り動作の修正を繰り返す。各踊り動作で一連のやり取りを画面共有することで、他の生徒は示範だけではわかりにくい動作のポイントが理解でき、各自で動作を修正しながら体験することができる。オンラインでの開催にあたり、着装が出来ない中、着物文化を知り体感してもらえる内容を目指して、以上のような事前の打ち合わせを入念に行い、当日はリハーサルにて最終チェックを行った。

マレーシア校の生徒の9割は自宅から参加し、残りの1割は学校から各自のデバイスで参加した。現地の担当教員が日本との窓口になり、事前準備や当日の現地手配を行った。日本の主催者側スタッフは6名で、筆者ら4名(マレーシアとの窓口1名兼務、着物文化講義2名、動画制作2名)、日本舞踊家1名、学生通訳1名である。ワークショップの正確な参加人数数は把握できなかったが、オンラインによる事前アンケートへの回答者数は347人（図7）であった。約2時間のワークショップのプログラムの内容と流れを表1に示す。言語は英語を使用し、現地Smallホールでは司会者の生徒により中国語のアナウンスもされた。

ワークショップでは開会の挨拶、参加者の紹介の後、日本の着物文化や日本文化に関する動画、大工等の匠の技による伝統工芸や歌舞伎上演などを鑑賞し、日本の伝統や文化、技術の紹介を通して日本への興味関心を高めた。着物文化に関する講義では、着物や浴衣の歴史や格の違い、男女の違い、着物の模様などについて講義（図1）を行ったあと、質疑応答時間を設けた。続く日本舞踊

表1　ワークショップの内容と流れ(約2時間)

1. オープニング挨拶、参加者紹介
2. 日本の着物と文化の紹介動画の観賞①
3. 着物文化に関する講義(図1)
4. 着物文化について質疑応答
5. 日本舞踊(藤娘)の紹介(事前収録の動画)(図2)
6.日本舞踊の「見立て」ワークを体験(図3、4)
7.日本舞踊について質疑応答(図5)
8.日本の着物と文化の紹介動画の観賞②
9.団体記念写真(図6)、閉会挨拶

図1 着物文化に関する講義

図2 日本舞踊(藤娘)の紹介

図3「見立て」山を表現

図4「見立て」楽しさを表現

図5 質疑応答

図6　Smallホール参加者

の紹介では、事前に収録した日本舞踊家（藤蔭里燕氏）による日本舞踊の動画「藤娘」（図 2）を配信し鑑賞させた。次に参加者が体験する「見立て」ワークショップを行った。「見立て」とは、モノや感情、情景などを手の動きや身体、扇などで使って表現する踊りの所作である。里燕氏による「山」（図 3）や「楽しさ」（図 4）など「藤娘」の踊りの中の見立ての表現の実演を見た後に参加者に呼びかけ体験させた。日本とマレーシアの現地 Small ホール、自宅にて皆が同時に日本舞踊の「見立て」の表現を真似て踊り、里燕氏からのアドバイスを受けながら実践した。現地生徒への着物や浴衣、扇子の用意はできないため、制服姿での体験となった。Small ホール内の大型スクリーンに踊りのお手本を映し出し、英語による解説を聞きながら踊ることで日本舞踊の一端を体験した。続いて日本舞踊についての質疑応答（図 5）を行った後、後半の日本の着物文化や日本文化に関する動画を鑑賞した。動画では、着物や袴姿の出で立ちと国歌を斉唱する様子などを紹介した。最後に記念撮影（図 6）をして閉会となった。

2-2　調査方法と内容

ワークショップの前後にオンラインによるアンケートを実施した。アンケートの使用言語には英語を用い、これまでの体験型ワークショップ用の英語版アンケートを基本に、遠隔ワークショップにあわせて変更を加えた。

事前アンケートでは、全 51 項目のうち着物の着装経験、日本舞踊の視聴経験（映像含む）については 3 件法（1：経験ある、2：どちらとも言えない、3：経験なし）で、日本文化やポップカルチャーへの認知経験については 5 件法（5：認知経験高い⇔1：認知経験低い）で設問し、着物文化への興味関心とファッションへの関心や意識については 5 件法（5：とてもそう思う⇔1：全くそう思わない）で回答させた。

事後アンケートは、全 29 項目のうち着物文化への興味関心、日本文化への興味関心について、5 件法（5：とてもそう思う⇔1：全くそう思わない）で回答させ、日本舞踊の見たい踊りのジャンルについて（あてはまるものに〇をする）回答させた。さらに、「ワークショップで楽しかったこと」「難しかったこと」「着物文化についての感想」を自由記述で回答させた。

2-3　解析方法

ワークショップ前後のアンケート調査を集計し、解析を行った。5 件法の回答は、量的に扱える間隔尺度として扱った。質問の回答結果を基礎統計量と回答割合の集計で全体的な傾向を把握した。解析ソフトには、SPSS Statistics20 を使用した。有意水準 p <.05、p <.01、p <.001 で有意差検定をした。また、自由記述の回答内容から対象者の傾向を検討した。

3. 結果および考察

3-1　アンケート回答者数

アンケートの回答者数について事前を図 7、事後を図 8 に示す。事前の 347 人に対して事後の回答者が 95 人と大きく減少した。事後の回答時間を設けなかったことに原因があると考えられる。事前の回答時間は、参加生徒が Zoom に入室してからプログラムの開始までの時間に教員からアンケート調査への案内が繰り返しなされたが、事後については終了の挨拶後の案内であったため既に多くの生徒が退出した後になってしまった。プログラムの中にアンケート回答時間を設ける必要があった。

事前回答者は、中学生 172 人、高校生 175 人、事後は中学生 45 人、高校生 50 人で中学生と高校生に差はないが、男女比は、事前の男子 100 人、女子 244 人、事後は男子 25 人、女子 70 人でそれぞれ女子が男子の 2.4 倍、2.8 倍になった。女子の方がワークショップへの関心が

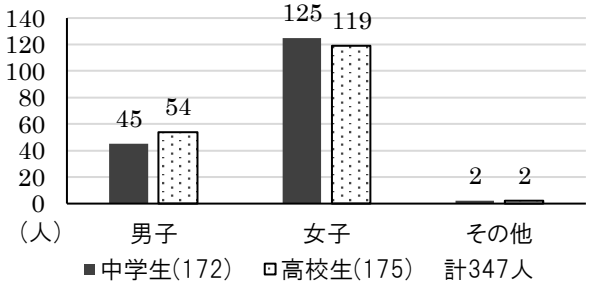


図 7 事前回答者数

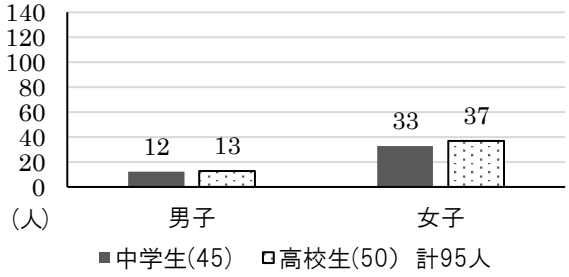


図 8 事後回答者数

高かったと考えられる。

3-2　事前調査

着物の着装経験と日本舞踊の視聴経験（映像を含む）についての結果を図9、図10に示す。

着物の着装は14%の人に経験があった。日本舞踊の映像を含む視聴経験は半数弱であった。日本の着物や日本舞踊に触れる機会は多くはなく、中学生と高校生間に有意な差はなかった。

日本のポップカルチャーや日本文化についての認知度や経験度について、中高生の平均値と有意差検定の結果を図 11 に示す。平均値 3.0 以上の高い値を示すのは日本食、ポピュラーファッション、キャラクターグッズ、アニメなどであるが、茶道、華道、日本舞踊などの伝統文化への認知や経験は低い。中高生間で映画、ポピュラーファッション、華道、伝統行事で有意差がみられ、総じて高校生が高いものの、認知度や経験度の高低の傾向は同じといえる。

着物文化やファッションへの関心や意識について、中高生の平均値と有意差検定の結果を図 12 に示す。ほとんどの項目で平均値 3.0 以上の高い関心が示され、中学生より高校生の方が平均値は高かった。

着物文化に関して最も高かったのは「日本の着物は美しい」(中高平均 4.28)であった。着物の美しさは高く評価されている。図 11 では「日本舞踊」(中高平均 2.19)の認知度は低かったが、図 12 の「日本舞踊に興味がある」(中高平均3.26)、「日本舞踊を見てみたい」(中高平均3.78)では中高生ともに 3.0 以上の平均値で関心は高い。これまで日本舞踊について知る機会がなかったため認知していなかったが、関心はあり平均値が高くなったと考えられた。中高生の有意差検定からは、「着物と帯の組み合わせに興味がある」「着物の模様に興味がある」「着物の流行に興味がある」「着物のマナーに興味がある」「着物を着られるようになりたい」(以上 p<0.05)、「着物は日本の伝統文化の一つだ」(p<0.01)に有意差がみられた。

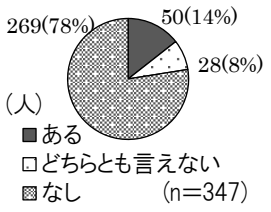


図 9 着物の着装経験

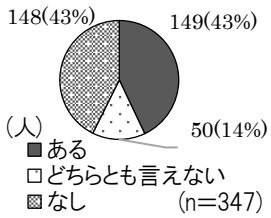


図 10 日本舞踊の視聴経験

いずれも高校生の平均値が中学生より高く、高校生は文化的なものへの関心が中学生より高いと考えられた。

ファッションへの関心に関しては、TPO や組み合わせなどの身だしなみへの関心は高く、「ファッション情報をチェックする」(中高平均 2.65)が最も低かった。ファッション全般に関して中高生の有意差はみられなかった。マレーシア中高生間のファッション関心度に違いはないようだ。

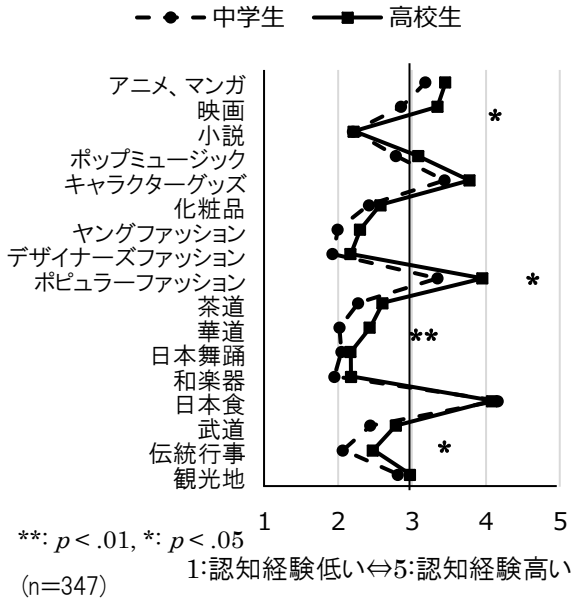


図 11 事前ポップカルチャーや日本文化への認知度･経験度

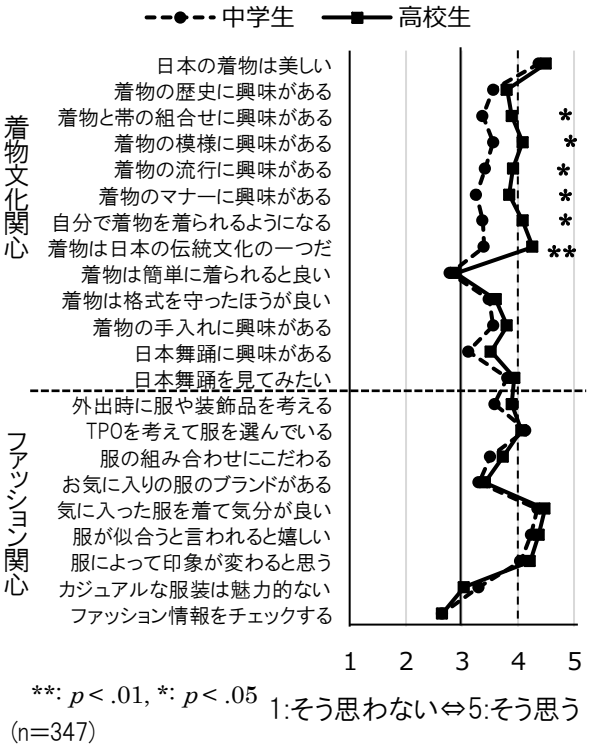


図 12 事前着物文化やファッションへの関心と意識

3-3　事後調査

事後アンケートの着物文化や日本文化についての興味関心について、中高生の平均値と有意差検定の結果を図13に示す。事前の着物文化への関心に比べ平均値が高くなり、4.0以上が多くを占めている。最も高い「日本の着物は美しい」は、中高平均で4.69となった。すべての項目で中学生より高校生（すべて4.0以上）の平均値が高く、全25項目中の8項目で有意な差（$p<0.05$）があった。有意差のある8項目では「着物と帯の組合せに興味ある」「着物の模様に興味がある」「他の伝統文化に興味を持った」など文化面への興味関心がより高く、「着物の種類をもっと知りたい」「着物の模様をもっと知りたい」「日舞の動作の意味を知りたい」などの「～を知りたい」という設問3項目もすべて含まれる。高校生は中学生より文化面での興味も高く、学びたい知りたい意欲が高いと考えられた。

3-4　ワークショップ前後の比較

ワークショップの前後の調査で、前後で同じ内容の設問について有意差検定を行った結果を図 14 に示す。以後の解析は、事後に回答した95名を対象とする。10項目中の9項目で有意差が見られた。事後は有意差のなかった「着物の歴史に興味がある」以外、4.0以上の高い平均値となった。最も高い「日本の着物は美しい」以外にも着物が日本の伝統文化であると強く感じている。ワークショップによって着物文化への興味関心はさらに高まったと言える。

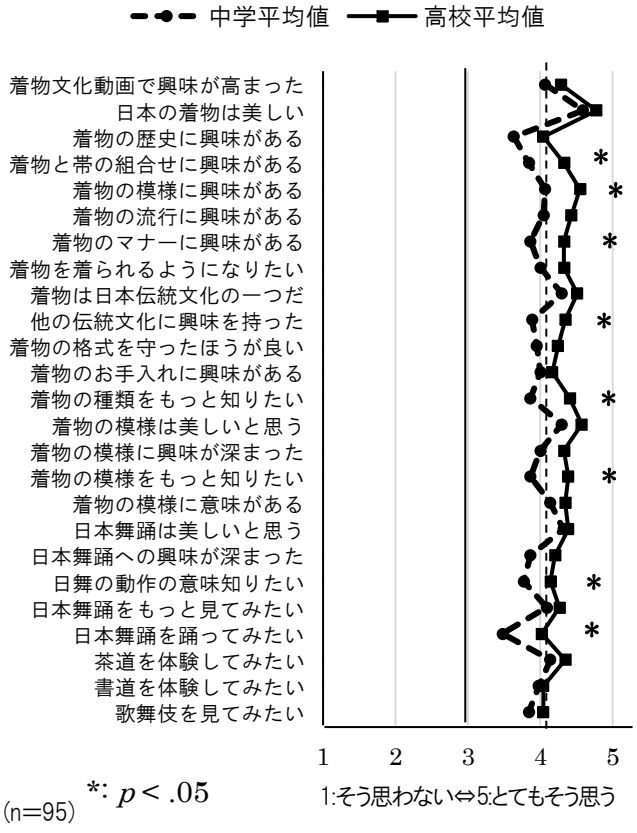


図 13 事後着物文化、日本文化への興味関心

3-5　事前事後の因子分析

ワークショップが中学生や高校生のどのような要因に影響を与えたのかを明らかにするために、授業前 22 項目(図 12)と授業後の 25 項目(図 13)に対して因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い要因因子の抽出を行った。α係数を算出し内的整合性を検討した。因子負荷量は全て 0.35 以上となり、事前調査は 3 因子、事後調査は 2 因子が抽出された。因子分析の結果と因子負荷量について事前を表 2、事後を表 3 に示す。

事前項目の第 1 因子は、着物文化への興味に関するものであり「着物文化興味」と命名した。第 2 因子は服の選び方や組み合わせに関する内容で「衣服への関心」、第 3 因子は流行ファッションへの関心であるため「流行への関心」と命名した。事後項目の第 1 因子は、着物文化と日本の伝統文化への関心であり「着物日本伝統への関心」とし、第 2 因子は、体験したい、見てみたいことなので「日本文化体験意欲」と命名した。

3-6　因子間の相互相関

因子分析より得られた事前 2 因子と事後 3 因子を相関分析によって相関関係を評価した。中学生の結果を表 4 に高校生の結果を表 5 に示す。

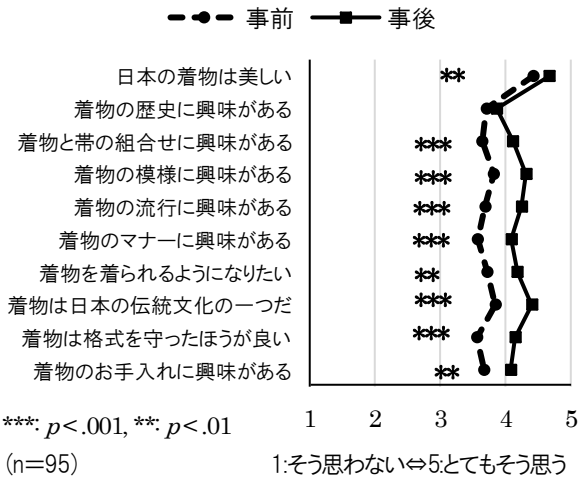


図 14 ワークショップ前後の比較

表２ 事前調査の因子分析 (n=95)

	第１因子	第２因子	第３因子	
着物の流行に興味がある	**.884**	-.007	.010	着物文化興味
着物のマナーに興味がある	**.880**	-.104	-.056	
着物と帯の組合せに興味がある	**.834**	.130	-.111	
着物の手入れに興味がある	**.796**	-.007	-.020	
着物の歴史に興味がある	**.775**	.063	.045	
日本舞踊に興味がある	**.774**	-.112	.330	
着物の模様に興味がある	**.762**	.072	-.077	
日本舞踊を見てみたい	**.762**	-.089	.091	
日本の着物は美しい	**.679**	-.032	.012	
着物を着られるようになりたい	**.659**	.101	-.103	
着物は日本の伝統文化の一つだ	**.622**	.245	-.124	
着物は格式を守ったほうが良い	**.522**	.008	-.093	
着物は簡単に着られると良い	**.430**	-.193	.254	
TPO を考えて服を選んでいる	-.104	**.836**	.008	衣服への関心
気に入った服を着ると気分が良い	.005	**.653**	-.042	
服が似合うと言われると嬉しい	.099	**.617**	-.087	
服によって印象が変わると思う	.101	**.578**	-.016	
服の組合せにこだわる	-.020	**.523**	.332	
外出時に服や装飾品を考える	-.002	**.475**	.192	
ファッション情報をチェックする	.035	.007	**.772**	流行への関心
お気に入りの服のブランドがある	-.119	.188	**.675**	
カジュアルな服装は魅力的でない	.015	-.048	**.459**	
累積寄与率			51.7%	

表３ 事後調査の因子分析 (n=95)

	第１因子	第２因子	
着物の模様は美しいと思う	**.860**	.000	着物日本伝統への関心
着物の模様には意味がある	**.847**	-.282	
着物のお手入れに興味がある	**.795**	-.051	
着物の格式を守ったほうが良い	**.790**	-.143	
着物の模様に興味がある	**.775**	.075	
着物の模様をもっと知りたい	**.751**	.130	
着物は日本の伝統文化の一つだ	**.750**	.042	
着物文化動画の鑑賞で興味が高まった	**.690**	-.006	
他の伝統文化に興味を持った	**.683**	.167	
着物と帯の組合せに興味がある	**.673**	.265	
日本舞踊は美しいと思う	**.638**	.160	
着物の流行に興味がある	**.635**	.287	
着物の模様に興味が深まった	**.594**	.272	
日本の着物は美しい	**.589**	.222	
着物の歴史に興味がある	**.579**	.294	
着物のマナーに興味がある	**.569**	.240	
着物の種類をもっと知りたい	**.567**	.396	
茶道を体験してみたい	**.439**	.315	
日本舞踊の動作の意味知りたい	**.405**	.404	
着物を着られるようになりたい	**.403**	.372	
書道を体験してみたい	-.328	**.969**	日本文化体験意欲
歌舞伎を見てみたい	-.060	**.885**	
日本舞踊を踊ってみたい	-.020	**.743**	
日本舞踊をもっと見てみたい	.274	**.559**	
日本舞踊への興味が深まった	.390	**.432**	
累積寄与率		62.8%	

中学生は、事前の着物文化への興味と流行への関心との相関を除き、互いに有意な高い相関がみられた。特に高かったのは事前の「着物文化興味」と事後の２因子「着物日本伝統への関心」(p <0.01)、「日本文化体験意欲」(p <0.01)間、および事後の２因子間(p <0.01)であった。

高校生についても、事前の「着物文化興味」と事後の２因子「着物日本伝統への関心」「日本文化体験意欲」間(いずれも p <0.1)、さらに事後の２因子間(p <0.01)で有意な相関が見られる傾向は、中学生と一緒であった。高校生は、事前の「衣服への関心」と事後の「着物日本伝統への関心」(p<0.01)にも高い相関がみられた。中高生間に相関の傾向の違いがあると考えられた。

表４ 中学生の因子間の相関係数

	1	2	3	4
1 事前着物文化興味				
2 事前衣服関心	.42**			
3 事前流行への関心	.28	.54***		
4 事後着物日本伝統への関心	.84***	.46**	.40**	
5 事後日本文化体験意欲	.85***	.40**	.39*	.91***

***: p< .001, **: p< .01, *: p< .05 (n=45)

※ 縦軸の数字が横軸の数字に対応する

3-7 全体の共分散構造分析

本ワークショップの効果をさらに検証するため、因子分析で得られた因子と相関分析結果を元にモデルを検討し、中高生全体の共分散構造分析(パス解析)を行った。因子分析の結果から得られた因子を潜在変数とし、各因子を構成する質問項目を観測変数として解析を行った。その結果を図 15 に示す。パス解析の適合度指数、CFI=0.774、GFI=0.583、AGFI=0.543、RMSEA=0.095 をそれぞれ示し、適合度指数は妥当と言えた。

パス解析からマレーシア中高生全体では、事前の「着物文化興味」から事後の「着物日本伝統への関心」因子へのパス（係数 0.69、有意確率 p<0.001）と、事後の「着

表5 高校生の因子間の相関係数

	1	2	3	4
1 事前着物文化興味				
2 事前衣服関心	.22			
3 事前流行への関心	-.28	.19		
4 事後着物日本伝統への関心	.46**	.59***	-.06	
5 事後日本文化体験意欲	.39**	.38**	.09	.77***

***: $p<.001$, **: $p<.01$, *: $p<.05$ (n=50)

※ 縦軸の数字が横軸の数字に対応する

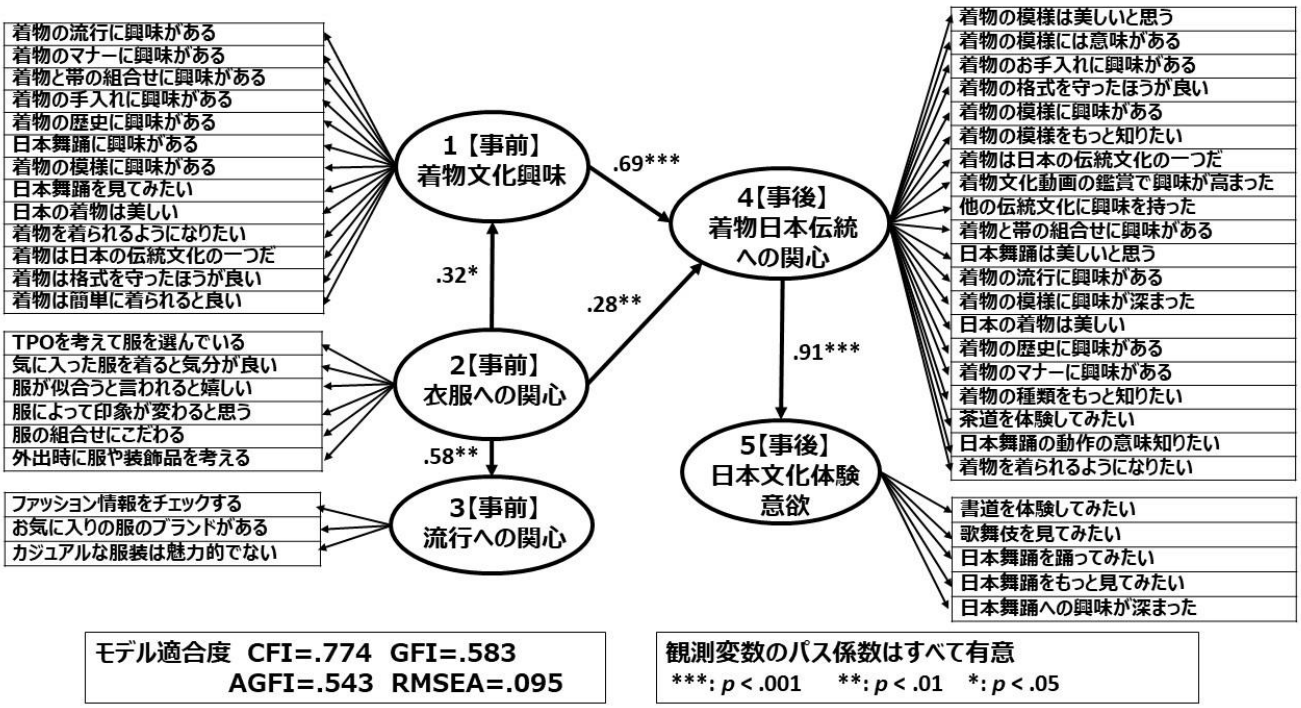
物日本伝統への関心」から事後の「日本文化体験意欲」へのパス（係数0.91、有意確率 $p<0.001$）に強い因果関係が見られる。また、事前の「衣服への関心」から事前の「着物文化興味」（係数0.32、有意確率 $p<0.05$）、事前の「流行への関心」（係数0.58、有意確率 $p<0.01$）、事後の「日本文化体験意欲」（係数0.28、有意確率 $p<0.01$）へのパスが引け、すべての因子に有意な因果関係があると言える。

以上から、もともと高い着物文化への興味や衣服の興味がワークショップへの参加によって、着物文化や日本文化に対する興味関心をさらに高めたこと、着物文化以外の日本文化の体験意欲を高めたことが明らかとなった。

3-8 中高生の共分散構造分析による比較

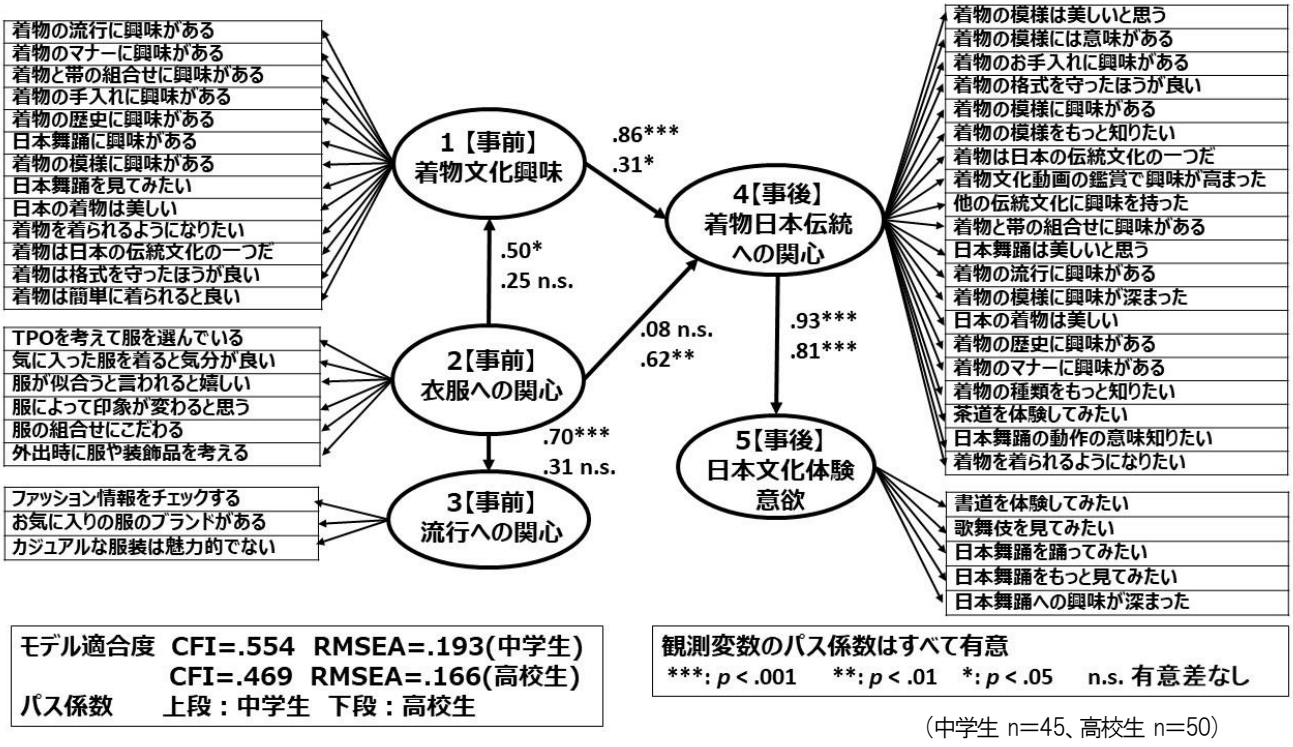
相関分析によって中学生と高校生では因子間の相関に違いが見られた（3-6参照）。そこで中高生のグループ間の比較を多母集団の同時分析による共分散構造分析を行い、着物文化への興味関心に及ぼす影響の違いを評価した。因子分析の因子を潜在変数、各因子の質問項目を観測変数として全体のパス解析のモデルを用いて解析を行った。その結果を図16に示す。図中のパス係数は上段が中学生、下段が高校生である。パス解析の適合度指数は、中学生 CFI=0.554、GFI=0.433、AGFI=0.373、RMSEA=0.193 で、高校生 CFI=0.469、GFI=0.456、AGFI=0.398、RMSEA=0.166となった。それぞれn.s（有意差なし）のパスがあり、いずれも RMSEA が 0.1 を超えて中高生全体のパス解析より適合度は低くなった。

中学生と高校生の因子間の影響の違いが有意差の有無に現れた。中学生は、事前の「着物文化興味」から事後の「着物日本伝統への関心」（係数 0.86、有意確率 $p<0.001$）、事後の「着物日本伝統への関心」から事後の「日本文化体験意欲」（係数0.93、有意確率 $p<0.001$）へのパスが有意に高いのに対し、事前の「衣服への関心」から事後の「着物日本伝統への関心」へのパスは有意差なしであった。事前の衣服への関心は着物文化への興味関心の向上に影響は少ないと考えられる。一方、高校生



(n=95)

図15 中高生全体の共分散構造分析



（中学生 n=45、高校生 n=50）

図 16 中高生の共分散構造分析による比較

は事前の「着物文化興味」「衣服への関心」の両因子から事後の「着物日本伝統への関心」が有意に高まり、さらに事後の「着物日本伝統への関心」から「日本文化体験意欲」が高まっていた（係数 0.81、有意確率 p<0.001）。事前の「着物文化興味」（係数 0.31、有意確率 p<0.05）より事前の「衣服への関心」（係数 0.62、有意確率 p<0.01）からのパス係数の方が高い値を示した。しかし、事前の「衣服への関心」から事前の「着物文化興味」「流行への関心」へのパスは有意差なしとなった。

以上から、中高生は事前の着物文化への興味から、事後の着物文化や日本文化への関心が高まり、さらに日本文化の体験意欲が高まることは共通しているが、事前の衣服への関心からの影響が異なることが明らかとなった。高校生は中学生に比べ、服の組合せや TPO を考えるといった身だしなみに配慮する意識の高さも、着物文化や日本文化に対する興味と結びついていることが示された。高校生が中学生よりも事前の着物文化やファッションへの興味関心が高く、着物文化の文化面の学習から日本の文化に関する興味関心の向上がみられたのは、一般的な発達過程で高校生の方が精神的により成熟していることが影響しているのではないかと考えられた。

3-9　日本舞踊のジャンルによる興味の差

事後の調査で「日本舞踊をもっと見てみたい」（中学生 4.1、高校生 4.3）は、中高生ともに高い興味を示していた（図 13）。どのようなジャンルの日本舞踊を見たいかについて、選択肢を提示し当てはまるものに〇を付けさせた。その結果を図 17 に示す。

最も多かったのは「女性グループの踊り」、次が「物語のあるもの」となった。美しい着物を着た女性の舞踊を見てみたい、ストーリー性のあるものを見てみたいと感じていた。

3-10　自由記述の回答

事後のアンケートでは、3 項目の自由記述の設問をした。「ワークショップで楽しかったこと」「見立てワークで難しかったことや挑戦したこと」「着物文化について思ったこと」である。それぞれの設問ごとに内容をカテゴリー分類し、集計を行った結果を図 18、19、20 に示す。

「楽しかったこと」は回答者の約半数が日本舞踊の体験であり、次に多かった「すべて」を加えると全体の 4 分の 3 の生徒が「日本舞踊の体験」（The Japanese dancing part, I enjoy the Mitate workshop, dance challenge 等）と答え、見立てワークや日本舞踊の動画視聴を含む踊りの体験を楽しんだことがわかる。事前の回

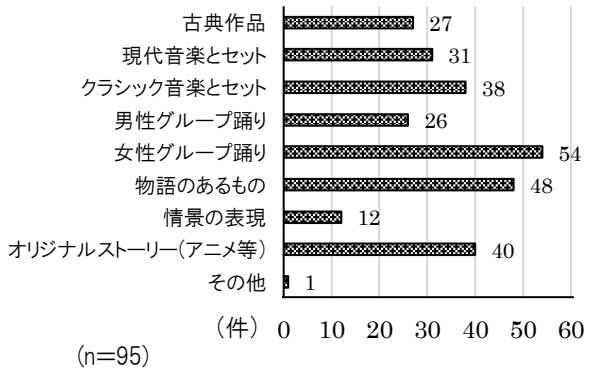


図 17 見たい日本舞踊のジャンル

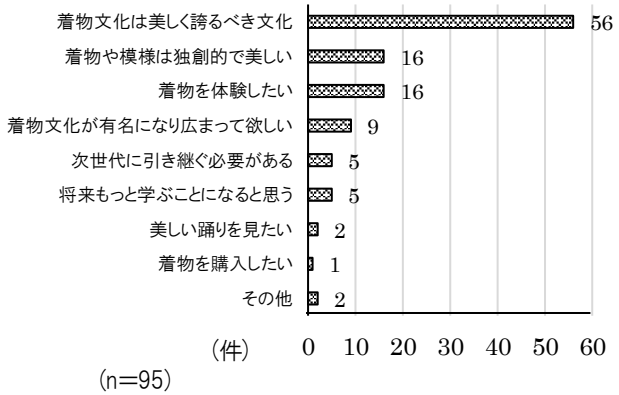


図 20 着物文化について思ったこと

答では、これまで日本舞踊を認知していなかった生徒も見られたが、踊りの美しさや、見立て動作の意味を知り、見立ての体験が楽しさにつながり印象に残ったようである。「着物文化のレクチャー」についても「すべて」と答えた人数を加えると半数近くになる。生徒にとって楽しく学べるワークショップであったことがわかる。

「見立てワークで難しかったことや挑戦したこと」の設問で多かった回答は「踊りの動きや表現」であった。手の動きや身体を使った様々な表現など、お手本のように美しく踊れないといった難しさが記述されていた。怒りや幸福感といった感情の表現(Express emotion dance 等)は特に難しさを感じたようである。扇子持っているとイメージする難しさ（I have to imagine that I am holding a fan）も記述されていた。一方で「難しいところはない」の回答もあった。その他「動きを理解すると楽しくなった」「モニター越しで難しく感じた」などがあり、対面で直接学べないことの難しさも感じていた。

「着物文化について思ったこと」では、誇るべき文化、素晴らしい文化、興味深くもっと学びたいなど、日本への理解が深まり着物文化を称賛する記述が多数あった。着物の美しさについて感動している言葉も多くあり、着物着装への希望も見られた。また、着物文化がもっと広まって欲しい、次世代に引き継ぐ必要がある、という継承に関する感想もあった。ワークショップ中の質疑応答では、着物の価格やお手入れに関するものがあった。アンケートの回答には「着物を購入したい」があり、ワークショップによって着物の購入意欲が高まり、実際に手に入れることを想定した質問が質疑応答で出たと考えられた。

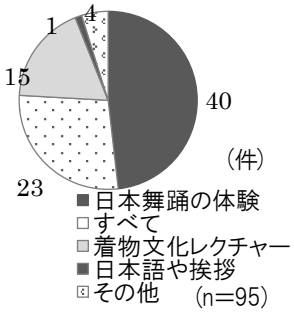


図 18 楽しかったこと

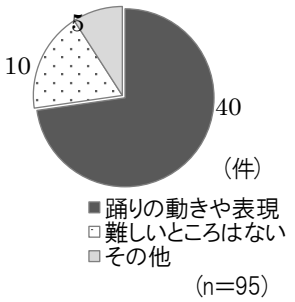


図 19 難しかった、挑戦したこと

自由記述の回答は、ワークショップが楽しい学びの時間であったことに加えて、着物文化への興味関心の高まりや体験意欲の高まりを感じられるものであった。これはパス解析の結果と一致する。背景として今回のマレーシアの生徒は学びへの意欲が高いという特徴を持つ可能性も考えられるが、画面越しの本ワークショップであっても着物文化への興味関心と体験意欲の向上に効果があることが明らかとなった。

3-11　遠隔ワークショップの課題と工夫

遠隔による難しさは、多くの生徒の反応がわからない、対話が少ないことであった。ワークの効果は実践時には確信できなかった。対面のワークでは実際に浴衣を着装して扇子を持って見立てワークを実施できたので、着物の所作と踊りが相まって日本舞踊の魅力を理解できていると、主催者側も実践の効果を体感していた。これまでの海外の実践は大学生が主体であるが、いずれも着装体験とワーク実践による効果は大きかった。しかし、現地教員からの有意義であったとの感想やアンケートの解析によって、遠隔手法であっても体験ワークを取り入れることの重要性が明らかとなり、事前の十分な打ち合わせが重要な役割を果たすことが確認できた。

4. 結論

本研究では対面によるワークショップが困難な中、デ

ジタル機器を活用した遠隔手法によるワークショップの実践が有効であるか、マレーシアの中学生、高校生の着物文化に対する理解を深め興味関心を高められたか、日本理解と文化交流への興味を高められたかを検証することを目的とした。また、中学生か高校生かという属性の違いについても検証を行った。

事前の調査から、マレーシアの中高生は日本のアニメやポップカルチャー等についての認知や経験は高い値を示したが、日本の伝統文化についての値は低かった。しかし着物文化への興味関心は高く「日本の着物は美しい」は最も高かった。特に高校生は中学生に比べ高く、多くの有意差のある項目が見られた。これまで触れる機会が少なく認知度は低かったが興味関心はあると考えられた。

事後の結果は、事前よりさらに高い着物文化への関心が示され、事後の高まりが有意にならなかったのは1項目だけであった。高校生は中学生よりすべての項目で高く、特に文化面への興味関心や学びへの意欲が高かった。パス解析によって、事前の「着物文化興味」や「衣服への関心」から事後の「着物日本伝統への関心」が高まり、事後の「着物日本伝統への関心」から事後の「日本文化体験意欲」が高まることが明らかとなった。一方で事前の「衣服への関心」から事後の「着物日本伝統への関心」への因果関係が強いのは高校生のみであった。自由記述からは、日本の着物文化は美しく誇るべき素晴らしい文化である、有意義な体験ができた、などの感想が回答された。興味関心の向上のみならず、着物文化を通して日本の理解も進み、将来もっと学びたいという意欲の向上、文化交流につながる意識の向上が見られた。

本ワークショップはこれまで対面で行うことが当然と考えられていた体験的実践を遠隔によって行うという初の試みであった。デジタル機器を利用して大勢のマレーシアの生徒と日本を結んでのワークショップは、着物文化や日本の伝統文化への興味関心を高めることに有効であるという結果を得た。同時に、遠隔手法のワークショップの有効性も示された。対面でのワークショップが理想であるが、対面が困難な環境において遠隔手法を用いることは、学びや交流の継続に役立つと言える。しかし、遠隔で体験ワークショップができたとは言うものの、生徒の反応が確認できないという課題も見つかり、視聴だけになってしまう生徒がいた可能性もあった。このような課題を今後に向けて再検討する必要がある。

5. 謝辞

本研究は「ICT の活用による家庭科衣生活領域の学習支援」（代表：川端 博子氏）基盤研究（C）（2021 年～2023 年度）（課題番号 21K02069）研究の一環として実施した。また、ワークショップにご協力いただいた日本舞踊家の藤蔭里燕氏、通訳をした学生の江藤遥奈氏、Tsun Jin High School（ツンジン高校）の Japanese Language Society Teacher Advisor 胡溧珉师（フーライミン）氏、帝人マレーシア株式会社の取締役社長　大野好弘氏、元横浜国立大学大学院の黒野理枝氏及び参加生徒、関係の皆さんに感謝申し上げる。

【引用・参考文献】

1) 新型コロナウイルスに係る日本からの渡航者・日本人に対する各国・地域の入国制限措置及び入国に際しての条件・行動制限措置、外務省、https://www.anzen.mofa.go.jp/covid19/pdfhistory_world.html 2022.8.26
2) 薩本弥生、川端博子、堀内かおる、扇澤美千子、斉藤秀子、呑山委佐子；「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発―「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信―、服飾文化共同研究最終報告書、2-119、2012
3) 薩本弥生、井野真友美、川端博子、斉藤秀子；きもの文化の海外発信をめざした体験的教育プログラムの開発―米国の生徒・学生を対象としたゆかたの着装を含む授業実践―、横浜国立大学教育学部紀要. I、教育科学、35-42、2020
4) 大矢幸江、薩本弥生、深海康子、扇澤美千子、齊藤秀子；タイの教員及び学生を対象とした着物文化の発信のための浴衣着装ワークショップ、教育デザイン研究、13、11-20、2022
5) 小幡信；デザイン系制作実習科目の遠隔授業での実施の可能性について、帝塚山学院大学研究紀要、1、53-66、2020
6) 小林義和、今田良徳；遠隔教育を考慮したものづくり授業の試み、工学教育研究講演会、40-41、2021
7) 駒沢女子大学；「造形」の遠隔授業、2020、https://www.komajo.ac.jp/uni/window/preschool/pr_class_20001.html
8) 岸磨貴子、大谷つかさ；異文化理解のための遠隔ワークショップのデザイン、京都外国語大学紀要、80、 177-191、2012